第 21 回　宮城県作業療法学会　シンポジウム＜概要＞

テーマ「作業療法教育を考える」 宮城県における現状と課題について

座長　高橋　由美　氏（東北文化学園大学）

「養成校と臨床現場の連携に関して」

紀國谷　惠子　氏　（東北福祉大学）

発表者は養成校教員であり、非常勤として回復期リハ病院での臨床に携わり 3 年目になる。
大きなブランクがあるため、スタッフの皆さんに助けていただきながら、OT の素晴らしさを再認識している。
今回教員という目を通して、OT たちが職場の教育システムや環境、県士会活動の取り組みなどを通して、卒業後どのように成長するのか、また実習生が臨床教育の中でどのように育つのかを目の当たりにする経験を話題提供したい。
また今年度から施行の指定規則の一部改正を受け、ガイドラインが新たになり、「専任教員は、臨床に携わるなどにより、臨床能力の向上に努めるものとする。」が加わった。教員が臨床に携わることでの卒前教育についてもふれたい。

「臨床現場における新人教育について」

長嶋　卓矢　氏　（宮城厚生協会　長町病院）

「新人教育」「卒後教育」は職能団体でも確立はされておらず、それぞれの職場により異なるのが現状である。卒後教育に関わる中で、当院で行われている新人研修などの教育システムについて紹介するとともに、手ごたえや課題についても考えてみた。どの方法がよいのか暗中模索の中、少しでも「卒前・卒後」教育の考えにつながりを持つことができるよう情報交換をしていきたい。

「臨床現場における新人教育について」

中山　梨絵　氏　（西仙台病院）

当院では、プリセプター制度をベースに新人教育を実施してきており、今年度からは CCS を組み込んだ教育方法を実施している。また、グループメリットを生かし他施設間との合同研修の実施、社会人基礎力へ着目した研修、看護部で行われているアイナースプログラムへの参加など他職種とも連携を図っている。

近年、時代に合わせて養成校での教育方法や臨床実習は変化を続けているが、臨床現場はそれに付いていけず葛藤している。私たち臨床現場のスタッフは新人教育に於いて、経験してきた中で良いものは残しながらも、時代に合わせた指導方法を見出していく必要があると考える。現在も模索中である為、ぜひ皆様と情報交換が出来ればという思いである。

「宮城県作業療法士会　教育部の活動から」

荒井　隆徳　氏　（宮城県作業療法士会　教育部長）

宮城県作業療法士会教育部では、日本作業療法士協会が定める生涯教育制度の現職者研修を中心に研修会を企画開催してきたが、県士会員のニーズ変化に伴い、近年、新たな研修会の企画開催やアンケートの実施など行いながら、それにこたえられるように活動を変化させてきた。

さらに、今年度からは組織編成とオンライン研修の実施を行う中で、どのようにして県士会員の教育を支援できるか、日々検討を重ねながら活動に取り組んでいる。

今回は、宮城県作業療法士会教育部での取り組みを紹介しながら、必要とされている内容についてさらに考えを深めていきたい。